

# 業界第一人者 後進指導も

厚生労働省は7日、工業や建築、調理など各分野で卓越した技能を持つ142人を2025年度の「現代の名工」に選んだと発表した。県内からは畳工の長田久富さん(71)と製鋼工の小野淳さん(54)、アーク溶接工の伊藤崇さん(51)、婦人・子ども服仕立て職の家内千恵子さん(77)、瓦

ふき工の宇田川和成さん(68)の5人が選ばれた。142人は都道府県や業界団体などが推薦した人の中から決めた。10日に東京都内のホテルで表彰式を行う。1967年度から始まり、今回が59回目。表彰者は本年度を含め7376人となった。

祖父の代から100年以上続く3代目畳職人。2001年には畳の職種が初めて競技種目となった技能グランプリで全国1位に当たら

る厚生労働大臣賞に輝いた。伝統的な手縫いから、イグサ以外の新素材を用いて機械で作る技術まで、全てにおいて優れた技能を有すると評価され、現在は日本畳産業協会の会長も務める。業界の第一人者として、各地で後進の指導にも当たっている。

日本人の生活習慣が洋式化されて久しく、高齢化の進行で車いす対応のフローリングも増え、畳を敷いた居間は減り続けている。そこで、転倒してもけがをしにくい衝撃緩和畳床を開発。将来的な医療費削減にもつながる取り組みのため、東京の各官庁に3年間働きかけ、介護保険における住宅改修の補助対象に認定された。「業界に貢献できたかな」と控えめに語る。

1923年、婿養子だった長田六之助さんが房総半島南端近くの神余で畳店を創業。2代目の父、富明さんの下で、15歳から働き始めた。「おやじは昔かたぎで、仕事を教えてくれなかつた。意見も合わず、いつもけんかばかり。20歳ぐらいまでは、ただ仕事をしていただけ」と苦笑いする。

「何かしなければ俺は駄目になる。日本一の畳職人になろう」と一念発起し、浅草で行われた競技会を見に行き、3冊で計10万円もする専門書を購入。「本で覚えて、実践」を積み重ね、腕を上げていった。79年に県技能コンクールに出場し、3位入賞も「悔しくて寝られなかった」。たゆまぬ努力を続け、後に関東大会で優勝。オランダで畳製作を演習し、ロッテルダム市から感謝状を受けたこともある。

97年に有限会社オサダを設立。2001年の厚労大臣賞受賞で初代日本一の称号を得るとともに、店を館山市正木に移転し、新工場とショールームを構えた。ペット対応型で丈夫な「タフリング畳」も開発し、顧客から好評という。若手職人の育成とともに、現在も指揮監督を務める。

半世紀を超えるキャリアでも「畳は趣味みたいなもの」で、情熱は尽きない。住み方は変わっても、日本特有の「座の文化」は不変と考え、これからも技を磨き続ける。(島津太彦)

有限会社オサダ 代表取締役

畳工 長田 久富さん(71)＝館山市＝



「現代の名工」県内5人